

千葉 あいご

Vol.
92

Index

- 1|2|3 自立支援セミナー2026
- 4 地域支援部会 管理者・サービス管理責任者研修会の報告
- 5 福利厚生委員会報告
- 6|7 わが施設の自慢・アピールポイント⑩
- 7 新事業所紹介
- 8 千葉知協トピックス
- 8 事務局だより・編集後記



協会公式Instagram▶
フォローをお願いします。

CHITEKIKYO

第92号 (2026年3月号) 発行日：2026年3月20日／発行者：里見吉英／編集者：畠山正昭・美留町麻未・成川 真

発行所：千葉県知的障害者福祉協会

【本部】 千葉市中央区中央3-15-6 山長（ヤマチョウ）ビル4F TEL 043-224-5721 HP <https://caid-net.com/>

【事務局】 船橋市金堀町499-1 大久保学園内 TEL 047-457-2462

自立支援セミナー2026

会場 千葉県教育会館



セミナー会場

令和8年1月31日に千葉県知的障害者福祉協会主催「自立支援セミナー2026」が開催された。今回のテーマは「ご利用者様の終末期を考える」であり、福祉施設で暮らすご本人の高齢化が進む中で、終末期をどのように捉え、どのように支えていくかを考える内容であった。

前半は、実践発表「終末期に寄り添って」として、北総育成園 施設長の白樫久子氏が司会を務め、しおさいホームのサービス管理責任者・石井佑貴氏、生活支援員・茂木彩音氏、い

すみ学園の支援課長・軽込進一氏が登壇し、現場の実践と課題が共有された。続いて「ふる里学舎静風荘における入居者の終末期の医療連携及び課題」では、ふる里学舎静風荘 施設長の飯田俊男氏より、医療連携の実際と難しさが語られた。

後半は全員の弁護士・大胡田誠氏による講演「全員の僕が弁護士になった理由」あきらめない心のきたえ方」が行われた。終末期支援の実際と課題、そして大胡田氏による支援者にも通じる在り方や姿勢についての講演という構成で行われた。

今回のセミナーでまず大きかったのは、終末期支援を「特別な支援」として切り離して考えるのではなく、日々の生活支援の延長線上にあるものとして捉える視点を、改めて持てたことである。実践発表では、ご本人の身体状況や生活状況が、年齢や病気の進行とともに大きく変化していく様子が具体的に示された。食事形態の変更、誤嚥性肺炎の繰り返し、歩行の不安定さ、転倒リスクの上昇、排泄介助や入浴介助の増加、重い病気の発見など、どれも現場で起こり得る現実であり、決して一部の施設だけの話ではない。日々関わっていると変化が少しずつ進む分、気づきが遅れたり、「まだ大丈夫」と見てしまうこともある。だからこそ、状態の変化を丁寧に捉え続ける姿勢が重要だと再確認した。

また、終末期支援は、ご本人の身体的変化だけでなく完結するものではない。家族、医療、職員体制、そして同じ場で生活する他の利用者さんへの影響など、複数の要素が同時に動く。受診や入院の判断一つをとっても、ご本人の状態、家族の意向、医療機関の受け入れ体制、事業所

の支援体制が絡み合う。共有された事例の中には、家族の事情により連絡が取りづらい場面や施設として判断が難しい場面もあり、終末期支援は単に「介助量が増える」という話ではなく、「関係者全体でどう支えるか」という支援の質そのものが問われる領域だと受け止めた。

その中で、特に強く残ったのは「記録」の重みである。終末期に近づくほど状態変化は早くなり、判断も繊細になる。何がいつ起きたのか、どのような対応をしたのか、ご本人の様子はどうかだったのか、家族や医療とどのようなやり取りがあったのかを丁寧に残しておくことは、支援の連続性を保つためだけでなく、職員同士の認識をそろえるためにも欠かせない。さらに、



会場の様子



登壇者の皆様

終末期は後から振り返ったときに「もつとこうできたのではないか」という思いが出やすい場面でもある。だからこそ、記録は単なる業務処理ではなく、支援の質を高める土台であり、振り返りの材料であり、職員の不安を減らす支えにもなると実感した。

加えて、記録は「事実を残す」だけでなく、「支援の意図を残す」ことも大切だと思う。終末期の場面では、同じ行動であっても、その背景にあるご本人の状態や、その時点での判断理由を共有できているかどうかで、次の支援の質が変わる。例えば、食事が落ちていくという記録一つでも、量だけでなく、食べ方の変化、表情、疲れやすさ、声かけへの反応、医療職からの助

言が残っていれば、次に関わる職員の見立ては深まる。忙しいと記録は後回しになりやすいが、こうした場面ほど、記録の質が支援の質を左右する。

また、前半の報告を通して、看取りそのものだけでなく、看取りの前後をどう支えるかという視点も大きな学びだった。長く同じ場で生活してきたご本人を見送ることは、職員にとっても、他の利用者さんにとっても大きな出来事である。日々の生活支援の中で関係を築いてきたからこそ、喪失感や戸惑いは大きい。終末期支援という医療連携や制度、緊急対応の話が中心になりがちだが、実際には「その後、残された人たちの心をどう支えるか」も支援の一部である。特に、同じ場所で暮らす利用者さんにとっては、いつもいた人がいなくなるこの意味は大きく、説明の仕方や場の整え方、職員の関わり方次第で、不安の大きさは変わる。今後、自分たちの現場でも、こうした視点を最初から持つておく必要がある。

ここで改めて思ったのは、終末期支援は「ご本人をどう支えるか」と同時に、「その場をどう支えるか」という視点が重要だということである。ご本人への支援は当然中心になるが、同じ場で暮らす利用者さん、日々関わってきた職員、そして家族も含めて、全体の関係性が揺れる場面でもある。だからこそ、事前の共有、役割分担、振り返りの場づくりが重要になる。特に職員側は、感情の整理が追いつかないまま次の業務に入ってしまうことも多い。結果として疲労感だけが残り、「自分の対応でよかったのか」という思いを抱えたままになることもある。支援の質を維持していくためにも、こうした場面での職員支援は、今後さらに意識的に位置づけていきたい。

さらに、生活の場としての事業所の存在意義についても考えさせられた。終末期になると医



大胡田弁護士

療との関係が強くなり、どうしても福祉の役割が見えにくくなる。しかし、ご本人にとって事業所は「支援を受ける場所」である前に、「暮らしてきた場所」であり、「関係を築いてきた場所」でもある。家族にとっても、事業所はご本人を預ける場所ではなく、一緒に生活を支える場であり、安心を感じる場であるはずだ。医療的判断そのものは医療職の領域であっても、ご本人の生活歴を踏まえて関わること、家族の思いを受け止めること、日常の延長としての安心感をつくることは、福祉の現場だからこそ果たせる役割である。

また、終末期支援では「どこまで施設で担うのか」という問いも避けて通れない。ご本人にとって望ましい形を考えたとしても、医療体制、人員体制、家族の状況、制度の枠組みにより、できることには限界がある。その中で大切なのは、限界があることを前提にしながらも、できる範囲で最大限にご本人の暮らしを守る姿勢だと思う。すべてを抱え込むことでも、逆に早く手放すことでもなく、医療や家族と連携しながら、福祉として担う部分を丁寧を果たしていくことが、今後さらに求められる。

後半の大胡田誠氏の講演は、テーマとしては

終末期支援と直接同じではないが、支援者としての姿勢を考えるうえで示唆が多かった。講演では、弁護士としての仕事の工夫、依頼者との信頼関係のつくり方、全盲夫婦での子育て、失明後の葛藤、大学受験や司法試験の過程、障害者差別解消法や合理的配慮など、多くの内容が具体的に語られた。その中でも特に印象に残ったのは、依頼者との信頼関係を土台にするという話と、「理解してほしければ、まず自分が相手を理解すること」「信頼してほしければ、まず信頼すること」という趣旨の言葉である。この言葉は福祉の現場にもそのまま通じる。ご本人や家族と関わる中で、こちらが無意識に力んでいたたり、構えていたりすると、それは相手にも伝わる。特に終末期のように不安が大きい場面では、支援者側の姿勢がそのまま関係性に出る。まずこちらが理解しようとする、相手を信頼する姿勢を持つことの大切さを、改めて胸に刻んだ。

また、大胡田氏の歩みからは、「無理だ」で思考を止めず、「じゃあどうするか」を考え続ける姿勢を学んだ。制度上・環境上の壁があっても、その都度工夫し、交渉し、周囲と協力しながら道をつくってきた話は、福祉現場にも重なる。終末期支援の現場でも、制度上の制約や人員体制、医療との連携の難しさなど、すぐには解決できない課題は多い。しかし、そこで「できない」で終わらせず、今ある条件の中で何ができるかを考え続けることが、支援の専門性でもある。

講演で触れられていた合理的配慮の話は、現場の支援を見直すうえで大切な視点だった。福祉の仕事では配慮は日常の一部になっている一方で、その配慮が本場にご本人にとって必要な形になっているか、職員ごとに差が出ていないかを点検する機会は意外と少ない。合理的配慮は、特別なことをするというより、その人にと

って参加しやすい形、わかりやすい形、安心してやすい形を具体的に考えることだと理解している。終末期支援でも同じで、ご本人の理解のしやすさ、家族の受け止めやすさ、医療との共有のしやすさをどう整えるかは、配慮の積み重ねである。さらに、合理的配慮は終末期支援における「意思の尊重」の捉え方にもつながる。ご本人が理解しやすい形で情報を伝えられているか、選びやすい形で選択肢を示せているか、表出しにくいサインを読み取れているかまで含めて考えなければ、意思尊重は形式的になりやすい。普段からその人の表情、反応、好み、嫌がることを丁寧に見ておくことが、終末期の意思尊重にもつながるのだと思う。

今回のセミナーを通して、自分としては、終末期支援を特別な場面の話として終わらせるのではなく、日々の支援の質を見直す機会として生かしていきたい。状態変化を捉える視点、記録の質、職員間の情報共有、家族との関係づくり、医療との連携の整理、そして支援後の振り返りや心のケアといった部分は、どれも終末期になって急に必要になるものではなく、普段の支援の積み重ねの中で育てていくべきものだと考える。また、事業所内だけで完結させず、法人として終末期支援をどう捉え、どのような支援を目指すのかを共有していくことも重要になる。終末期支援は制度や方法論だけで整うものではなく、現場で関わる一人ひとりの見方や姿勢が大きく影響する領域である。今回の学びを、自分自身の支援の見方だけでなく、事業所全体、法人全体の支援の質向上にもつなげていきたい。ご本人の人生の終盤に関わる責任の重さを改めて受け止めつつ、一相手を思うこと」を土台にした支援を、日々の実践の中で積み重ねていく。

以上報告します。

広報委員会 ベストサポート 小野 恭太

地域支援部会 管理者・サービスマネジメント研修会の報告

地域支援部会担当役員 島田正仁（グループホーム野菜）

令和7年12月8日にグループホーム等管理者・サービスマネジメント研修会を開催いたしました。今年度は地域支援部会、災害対策委員会共催での研修とし、37法人67名の方にご参加いただきました。

第1部は「制度上求められる事項について指導監査の観点から学ぶ」を題とし、千葉県健康福祉部障害福祉事業課虐待防止対策・法人指導班、木野内駿登氏より説明をいただきました。令和6年度の指導状況、障害者虐待防止の推進、運営指導等における指摘事項、令和7年度の指導監査の重点事項、記録書類の作成や保管についての5つの項目を柱とした内容でありました。令和6年度の制度改正に伴う運営指導における重点項目についても丁寧に示され、行政として重視している点や、指摘事項を具体例とともに説明していただいたことで、事業所の現状を振り返る良い機会となりました。

第2部は「災害対策について考える」をテーマといたしました。研修内容を協議していた7月30日、カムチャッカ半島付近で地震が発生し、太平洋沿岸の広い範囲に対し津波警報が発表されました。私の事業所におきましても津波警報が発表され、法人全体で津波避難行動をとりました。各事業所における災害に対する実践的な対応力の向上を図りたいとの思いから今回の研修を企画いたしました。まず、千葉県知的障害者福祉協会災害対策委員会委員長、高橋重幸氏より千葉県知的障害者福祉協会における災害対策委員会の役割についてお話しいただきました。令和3年4月1日より活動を開始した災害対策委員会の発足経緯、果たす役割、今までの活動として新型コロナウイルス集団感染施設や能登半島地震被災地への介護職員派遣、千葉県DWAATとの連携等について報告をしていただきました。

後半は「東日本大震災からの教訓」を題として、当時、宮城県仙台市で共同生活援助事業を行っていた飯

田克也氏（社会福祉法人つどいの家地域生活支援部長）、横谷聡一氏（社会福祉法人みんなの広場理事長）をお招きし、災害時に直面した厳しい現実をありのままお話しいただきました。情報が得られない中での避難行動、建物の状況、職員の安否など不確定な要素が山積する中で利用者さんの生活を守ることに真摯に向き合った「発災直後の対応」、全壊したグループホームを新築するなどの「復興期」、これからの災害対策についての「現在の歩み」を報告していただき、被災地で実際に起きていた現実を直接伺うことで実践的な視点から学ぶ貴重な機会となりました。

2つ報告の中で災害時には地域住民や他事業所との連携が必要不可欠であり、実際に大きく機能したとのことでありました。「顔の見える関係作り」が共通するキーワードであげられており、平時からできる災害対策として取り組む必要があると強く感じました。また、研修同日、23時15分頃、青森県東方沖で最大震度6強の地震が発生し、北海道、青森、岩手に津波警報が発表されました。「災害はいつ起こるか分からない」を改めて実感する一日でありました。最後にこれからも実践的で現場で役に立つ研修を企画してまいります。本研修に御協力いただきました皆様には深く感謝申し上げます。

研修会に参加して

災害対策委員会 八日市場学園 鈴木喬大

今回、地域支援部会と災害対策委員会の合同研修に参加させていただきました。研修では、実際に被災した経験をお持ちの方々から当時の凄惨な状況についてご講演をいただきました。その内容は、想像を絶する状況の中で、必死に知恵を絞り生き抜こうとする様子、届いた物資を自ら使わず利用者に分け

与える様子。その一方で、被災状況に耐えられず自ら命を絶ってしまったおつかと葛藤する様子や、希望持てず明日からどのように生活していったらいいのか途方に暮れている様子など、リアルな被災現場を知ることができました。

また、講演を通じて、被災時に何が必要で、それは何処にあつて、どの程度備蓄されているのか、資源を可視化する事の大切さや、それらを自治体とともに協力し周知させる事、自治体と事業所同士の信頼関係を強固にしていく事の重要性など、実際に被災した際に使うことができるモノやシステムが大事だと教えて頂きました。

近年、『災害対策』という言葉が広く深く浸透する時代となり、AI曰く、災害対策とは、『いつ起こるか分からない自然災害や緊急事態に対して備え、その被害を最小限に抑え、定められた計画のもと、迅速に対処する事。』と書かれております。

近年起こった大きな災害ですと、2024年に能登半島地震や洪水などの大規模水害、2025年にはカムチャッカ沖地震や青森県地震など想定を超える災害が立て続けに発生しています。私たちは、電気が当たり前のようにならなくなって世の中で、あらゆる緊急事態を想定し、どのように対処していくのか、途方もない計画の作成を余儀なくされています。

今回の研修で、それぞれの事業所において、網羅的に仕上げられた災害対策や計画も重要だと考えますが、それに加え、自治体や事業所同士が実際に顔を突き合わせ、被災した場合にどのように協力して動く事ができるのか議論する時間や、実際に被災した場合に発揮される地域の方々や事業所との結束力が大切だと思います。

最後になりますが、このような合同研修で普段接点のない方々と研修を行い、情報交換を行うこと自体が災害対策の第一歩ではないかと感じました。

福利厚生委員会報告

第30回施設職員交流バレーボール大会



ふる里学舎チーム

今年度はプロバスケットリーグの関係で千葉ポーターリーナが年内に使用せず、令和8年1月15日の開催となりました。この職員交流バレーボール大会は今回で第30回となり、途中コロナで中止となった年もありましたが福利厚生委員会では最長の30年以上の歴史ある大会となります。

今回も昨年同様にサブアリーナは使用せずメインアリーナのみ3面コートでサブ1回のルールとし16チームによる計22試合とさせていただきます。それには審判のママさんバレーボール連盟の皆さんと参加チームの皆さんのご理解とご協力によりスムーズな試合進行ができました。

見事に復活優勝!! (ふる里学舎チーム)

ここ2年は悔しい思いをして来たふる里学舎。大会3連覇のかかった第28回大会で惜しくも決

福利厚生委員会委員長
社会福祉法人みつぎ会

上総喜望の郷 中村 敏久

勝で敗れてから3年振りの優勝！今回の山場は決勝進出のかかった準決勝。奇しくも2年前に決勝で敗れた大会2連覇している野栄福祉会との対戦に見事ストレート勝ちでリベンジ達成!! 続く決勝は粘る大久保学園を振り切り復活の優勝を果たしました。アップレ!

こちらも復活！しかし惜しくも準優勝！ (大久保学園チーム)

ここ2年は2回戦や3回戦で優勝したチームに敗れ不運な分もあった大久保学園。それでも今年はずっかりと決勝まで勝ち進み今年こそはと期待されましたが惜しくも準優勝。決勝戦でも粘りを見せふる里学舎を追い詰めるも... 惜しい！後もう一步！しかし決勝戦に相応しい良い試合でした。

《大会結果》

- 優勝 ふる里学舎
- 準優勝 大久保学園
- 福利厚生委員長賞 安房広域福祉会
- 敢闘チーム賞 北総育成園

《真大会出場チーム》

- 東葛地区.. 大久保学園・まつど育成会
- 千葉地区.. ふる里学舎・あしたば・みらい工房・ききょう会
- 北総地区.. 野栄福祉会・八光聰・佐原聖家族園・北総育成園
- 成田地区.. 清郷会・菜の花会・千手会
- 県南地区.. 安房広域福祉会・ふる里学舎和田浦・みつぎ会

計16チーム

第53回「手をつなぐ作品展」

北部地区

令和8年1月6日、7日にイオンモール八千代緑が丘店アゼリア広場において、第53回手をつなぐ作品展が開催され、売り上げの合計は93万円となりました。

今回の北部地区作品展には15の多くの事業所が参加し、丁寧に作られた品々が並べられ、多くの方々にお買い求め頂くとてもよい機会となりました。

来場された方は、製品や展示品を直接手に取られ、興味を持ってくださる方も多く、活気ある作品展会場となりました。利用者の方々が活動の一環として制作された作品を通じ、社会とつながっている様子を身近で感じることができました。

また、来場された方々へ日頃の活動の様子を直接お伝えする機会にもなり、活動への理解を深めていただく貴重な場となりました。同時に、今後も歴史ある作品展の継続した開催の必要性を強く実感いたしました。

開催に至るまで、本当に多くの方々に助けて頂き、今年度の作品展が無事に終了する事が出来ました。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。



支援スタッフ
から見た!

わが施設の自慢・アピールポイント⑤0

平成20年度から49回にわたり117の“プチ自慢”をご紹介してきましたこのコーナー。今回は3つの“プチ自慢”です!

印旛ブロック いんば学舎・陣屋

「共に」をモットーに「笑顔溢れる集いの舎」

いんば学舎・陣屋は、障害のある方が「共に過ごし、共に活動し、共に楽しむ」ことを大切にしている、印西市にある生活介護事業所です。施設内は天然木を使用した温もりある開放的な空間で、車椅子をご利用の方も安心して過ごせるよう、環境面にも配慮しています。一人ひとりが自分らしく、無理なく活動に参加できる「集いの舎(いえ)」を目指し、四季を通して多彩な取り組みを行っています。

私たちの日々の活動の中心になるのは農作業です。中心となる農作物では、小麦や大麦を育て、パンや香ばしい麦茶づくりに挑戦。蕎麦の栽培から蕎麦打ちまでを体験したり、収穫した野菜や小豆を使ってケーキやどら焼き作りに取り組んだり自然の恵みを感じながら食の広がりを楽しんでいます。汗まみれ、泥まみれになりながら手間暇かけて育てた採れたて野菜は、近隣の販売所を通して地域の方々にも親しまれています。また、陶芸や



陣屋玄関ホール



東内川農場(畑)の活動風景



陶芸活動の様子

紙漉きなどの創作活動にも力を入れていて、いんば学舎が営むアトリエで展示・販売を行っています。作品は施設内にも飾られ、日々の暮らしに彩りや豊かさを添えています。その他、音楽活動やポッチャ等の余暇活動、四季折々の行事を通して、笑顔あふれる時間を大切にしています。

これからも人と人、自然と暮らしがつながる、笑顔溢れる集いの場を提供するとともに互いを思い合い、支え合いながら新たな活動に皆で挑戦していきたいです。

生活支援員 一ノ宮 敏江

市原・安房・君津ブロック 袖ヶ浦ひかりの学園

～余暇活動の充実～

袖ヶ浦市にある袖ヶ浦ひかりの学園は平均年齢56歳の自閉症の方が53名入所する障害者支援施設です。また併設の定員10名の生活介護事業(通所)の方たちを含めると毎日約60名の方が入所の3グループと通所のグループ、計4グループに分かれて、日々の生活を送っています。

皆様ご存じのようにコロナ禍により一時期活動が制限されていましたが、しかし、昨年度から少しずつ「外出」「個別活動」「行事」を増やしています。特に今年度は毎月1回行事を開催しています。また行事の企画・運営を中堅職員に任せて、マネジメント研修の側面も持たせています。行事の企画・運営に携わる機会が少なかったため、職員にとってはとても良い学びになっています。一方、利用者さんたちはと言うと、「何をやるんだろう」と不安や緊張を感じる方もいらっしゃいますが、それでも行事に参加すると非常に良い笑顔を見せてくれました。スタンプラリー、還暦祝い、運動会、



ひかりの学園生活棟



ハロウィンウォーキング

芋煮会、ハロウィン、X'mas会、新年会、写真コンテスト、バスハイクなどなど。これらの他に個別での外出や活動、グループでの余暇活動など入れると昨年度とは比べものにならない量の活動を行っています。多種多様な行事を職員が企画・運営してくれており、利用者さんたちの生活が以前のように活気あるものになってきました。

今後も利用者さんたちが楽しく、その人らしさを発揮できるような活動を提供してきたいと思えます。

サービス管理責任者 菅原 良武

いすみ・長生ブロック 社会福祉法人槇の里 いすみ学園

～電車のある学園～

社会福祉法人槇の里いすみ学園は昭和59年4月1日に事業を開始し、今年で42年目となる障害者支援施設です。いすみ市中部の小高い丘に生活棟を構える自然豊かな事業所で、昨今は猪やきよんなどの野生生物もよく顔を見せるようになってきています。

利用者定員は開設当初の30名から数度の増員を経て52名で、そのほとんどの方が東京都民となっています。もっとも利用者はすでに30年以上千葉県で暮らしていますので、立派な千葉県民でもあり、日々たくましい姿を見せてくれています。

学園のプチ自慢は「電車のある学園」です。もと東急東横線を運行していたデハ3455車両は永らく学園のシンボルとして地域や電車愛好家に親しまれてきました。また利用者にとっても憩いの場として活用されてきました。とはいえ寄贈されてすでに30年以上経過し、車両の老朽化は避けようのない事態となっていました。このままでは車両そのものの維持が難しいと判断し、クラウド



いすみ学園外観

ドファンディングに挑戦することとしました。結果2024年1月にはセカンドゴールも達成し、354人の方から670万円超のご寄付をいただき、東急デハ3455は見事に往時の姿を取り戻すこととなり、関係者一同大きな喜びをもって迎えましたし、利用者も自分たちが学園に来た時のことを思い出すかのようにとても喜んでいました。今後も利用者ともどもこの車両を大切に、地域に愛される学園にしたいと思います。

支援課長 軽込 進一



mazekoze



外観



御用聞

生活介護事業所 mazekoze の取り組み

mazekozeは、千葉市若葉区下田町にある生活介護事業所です。2021年（令和3年）4月に開所し、5年目を迎えました。利用者さんの平均年齢は25・7歳と、若い方が多く通われています。どれもだけ重い障害があっても、働けるという選択肢があってもいいのではないかと考え、余暇活動ではなく仕事を提供しています。決して事業所の中だけで完結することなく、外との繋がりを大切にする。そして、今まで「支えられる側」であった彼らが、「支える側」にまわっていく。そういった事を意識しながら、仕事内容もこだわっています。

新事業所紹介

株式会社ベストサポート
生活介護事業所
mazekoze生活介護事業所 mazekoze の
取り組み

mazekozeの取り組みの1つに、「御用聞」があります。高齢者のちょっとした困りごとを解決する仕事です（庭の草刈り等）。mazekozeがある若葉区というエリアは、千葉市6区の中で2番目に人口が少ないエリアになります。一方で、高齢化率は千葉市トップです。障害ある彼らが高齢者を支える存在になる。そう願って始めた仕事ですが、今ではリピーターが増え、1カ月の予定が埋まってしまいう程です。また、御用聞の一環として、社会福祉協議会（東南・金親地区部会）と協力し、高齢者のゴミ出し支援にも力を入れています。

利用者さんの仕事だけではなく、彼らの居場所作りにも積極的に取り組んでいます。地域に向けた発信として、地域の方々と一緒に開催している「朝市」。近隣幼稚園、社協と一緒に開催している「ちびっこフェスタ」。様々なイベントを通して、mazekozeの存在意義や障害理解に繋がっていきたいと考えています。

管理者 住谷翔太

千葉知協トピックス

スポーツ文化委員会 藤崎 明

第52回手をつなぐスポーツのつどい

令和7年9月25日(木)、第52回手をつなぐスポーツのつどい(本協会、千葉県等4団体が主催)が千葉県総合スポーツセンター陸上競技場(千葉市)を会場に1,227名の参加を得て、開催されました。当日は気温28℃晴天とまさに秋晴れでした。

午前は初めての体操を皮切りに障害物競走(635名参加)、新種目紅白めぐり対決(684名参加)、あんばんレース(781名参加)が行われました。午後は35チームが参加した対抗リレーで大いに盛り上がり、フォークダンスで和気あいあいと1日を締めくりました。



利用者男子4x100mリレー決勝

対抗リレーの主な成績は次の通りです。

児童の部 優勝…ふる里学舎船橋、準優勝…ふる里学舎十倉、3位…放デイSORA

成人施設利用者の部・男子 優勝…ふる里学舎蔵波、準優勝…ふる里学舎、3位…青松学園

同女子 優勝…富里福葉苑、準優勝…大久保学園、3位…横の実会

職員の部・男子 優勝…ふる里学舎、準優勝…大久保学園、3位…みづき会

職員の部・女子 優勝…ふる里学舎、準優勝…大久保学園、3位…九曜会

なお、お昼休み時間には絵画展の表彰がありました。表彰は次の通りでした。最優秀賞…宇田川蛸子さん(ピーアンビジャス)、千葉県障がい者スポーツ協会々長賞…高橋由紀奈さん(すえひろ工房やまぶき)、千葉県知的障害者福祉協会々長賞…平野晴美さん(すえひろ工房やまぶき)、千葉県手をつなぐ育成会々長賞…高橋由紀奈さん(ピーアンビジャス)、優秀賞…



最優秀賞 「TAKKYU」 宇田川蛸子さん



展示金賞 さくさくべ
でい、さくさくべ
鶴沢かずみさん
(すえひろ工房やまぶき)、同、佐々木尋宗さん(ピクシーフォレスト)。

第34回さわやか芸能発表会



舞台金賞：ネクス桜田小、アーアンドデイだいいい

令和7年12月2日(火)、千葉県文化会館大ホール(千葉市中央区)にてさわやか芸能発表会(共催千葉県)を開催しました。

舞台発表では、7団体が出演し、日頃から練習を重ねた演目が次々と披露されました。審査員には今回千葉県障害者芸術文化活動支援センター長のこまちだたまお氏(センターは「千葉アール・ブリュットセンター」のつもりとして、人材育成講座の実施、展示会の開催、情報収集・発信等を行い、地域における障害者の芸術文化活動を積極的に支援しています)が新たに加わり、千葉県育成会会長と千葉市育成会会長、施設関係者3名、敬愛短大生3名、計9名で構成されました。厳正なる審査の結果、金賞(最優秀賞)はネクス桜田小・アーアンドデイだいいい「よさこいエイサー琉球王ダンス」が獲得しました。銀賞(優秀賞)はしもふさ工房、ひかり学園アネックス、富里福葉苑の3団体でした。銅賞は、ピーアンビジャス、大久保学園、吉沢学園の皆様でした。

展示部門は8団体が、創意工夫された見事な作品で競いました。こまちだたまお氏からは展示された作品を傷つけないよう丁寧に掲示しているかというこまやかな配慮があるかどうかも評価の対象とのコメントもありました。金賞はでい、さくさくべの造形でテーマは「でいさくさくべのふゆ」でした。銀賞は八街わらの里、でい、まさご式番館、豊四季光風園の皆様が受賞しました。銅賞はたかね園、作山更生園、第2ひかり学園、ひかり学園という結果でした。ゲストにはうたのおねえさんとしてネパール人の桶田瑞紀さんと久保沙織のお二人にご出演いただきました。クリスマスソングなどもご用意いただき、会場の皆様と一緒に熱唱いただきました。次回も千葉県文化会館大ホールで12月8日(火)に実施予定です。皆様のご参加をお待ちいたしております。

第29回千葉ゆいあいピック駅伝大会

令和8年1月12日(成人の日)、第29回千葉ゆいあいピック駅伝(千葉県知的障害者陸上競技協会等主催、本協会等後援)が千葉県総合スポーツセンター陸上競技場(千葉市)で開催されました。参加は38チーム、競技者数はロードレースの部男女16名を含め、計167名の参加がありました。

コースはこれまで改修工事で野球場周囲の園路を使用できませんでしたが、このほど改修工事が終わりで前のコースに戻って行われました。ハーフマランの部(6区間21・0km)では、1区(6・9km)でひかりAC(ひかり学園)安西選手が飛び出したものの、2区(1・3km)で急降下。猛然と追いつけてきたふる里学舎伊藤選手が区間賞を獲得する走りで見事に躍り出ました。3区(2・4km)では光の村の村上選手が区間賞で首位に立つ白熱した展開になりました。4区(2・4km)ではふる里学舎落合龍馬選手が区間2位の堅実な走りで見事に首位を奪還し、その後は5区(2・4km)落合龍馬選手、アンカー(5・6km)和田選手の2人が連続区間賞で2位光の村チームを1分01秒引き離して優勝しました。3位は市川大野高等学園チーム、4位は市立船橋特支チーム、5位はひかりACチーム、6位はとまりぎJCチームでした。



プロ競輪選手による誘導～スポーツセンターで

それ以外の各部門の上位の結果は次の通りです。**クォーターの部**(5区間10・6km)男子Ⅱ優勝…ふる里学舎A、準優勝…ふる里学舎B、第3位…富里福葉苑。同女子Ⅱ出場なし。エイス(3区間5・4km)男子Ⅱ優勝…市川大野A、準優勝…市川大野B、第3位…不二学園。同女子Ⅱ優勝…不二学園B、準優勝…市川大野B、第3位…富里福葉苑。同壮年男子Ⅱ優勝…富里福葉苑A、準優勝…大久保学園B、3位…富里福葉苑B。同壮年女子Ⅱ優勝…ひかりAC。

事務局便り

事務局長 千日 清

年度末を迎えて、事業計画を作成中。変化が求められる、変化を必要とする福祉。課題は山積。一年を振り返りながら挑戦。

編集後記

おおはし園 成川 真

職場の都合で協会が開催しているセミナー、研修に参加する事は難しい事が多いです。また、遠方や知らない施設へ見学に行く事も気軽にはできませんね。「あいご」目を通して頂けると、その疑似体験ができるような気がします。今後ともよろしくお願致します。